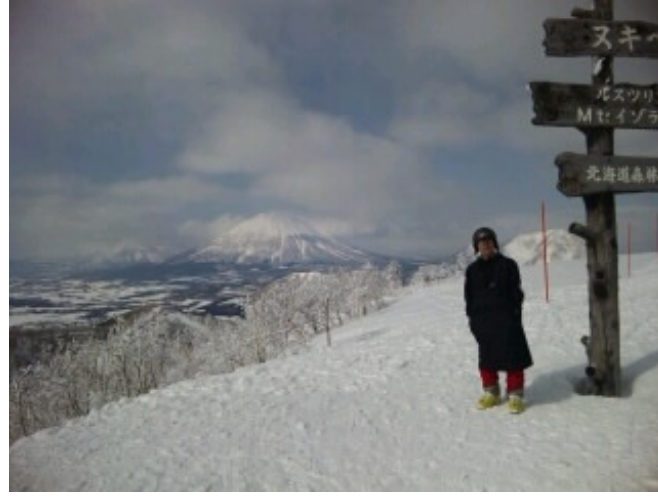




宮古島の日々

'92.4.25～5.5

We sat dining on endless meat and on sweet wine
And when the sun went down and the darkness came on,
We lay down to sleep beside the surf of the sea. (Odyssey)

われら、渚にすわりて肉を食（は）み、ぶどう酒をあほる
陽（ひ）沈み 闇来たれば 砂に横たわりて寄せる波に夢を浮かべる(オディッセイア)

4月25日（土）

朝、8時45分に羽田をジェット機で出発した。浜松町の駅で早めにチェックインしておいたので窓側で禁煙の席がとれた。ぼくの座ったのは右側で、窓から頂のまだ白い富士山がきれいに見えた。伊豆半島もほぼ全貌を見ることができた。飛行機はやがて高度を上げながら本州から離れて雲の上に出る。このフライトは南西航空S W A Lの便だが、ぼくらを乗せたのは実際には親会社のJ A Lのジェット機だった。ゴールデンウィークの時期になると客が増えるためこの頃から2倍以上の客を乗せられる大型機をピンチヒッターで飛ばすのだろう。この羽田-宮古間の直行便は国内便としては滞空時間が最も長く、約2時間50分のゆうゆうたるものだ。これだけかかるので国内便では珍しく機内食が出る。そして宮古島は国内とはいえ亜熱帯地方にあり、ちょっと行き過ぎてしまうと台湾に届いてしまう。

伊豆を過ぎ幾つかの島を雲間に見ていると、やがて翼の下はまぶしく輝く雲しか見えなくなり、その多様な形と白の陰影の美しさに見とれていたが、ついにその単調さに気づいてぼくは窓から顔を離した。そなえつけのイヤフォーンで落語を聴きはじめたが機内放送で何度か中断されたのでそれもやめ、前の座席の背のネットラックに入っていた南西航空の雑誌コーラルウェイを取り出して見ることにした。宮古島に関する情報のページを見ていると、4月26日にトライアスロン・レースがあることが紹介されていた。26日といえば翌日だ。ぼくは、この時期にその有名な宮古島トライアスロン・レースがあるはずだということは知っていたので運がよければ観戦できると思っていたが、翌日であることを知ってますます興味が膨らんできた。

泳いで、ペダルをこいで、そしてかけって。このレースはすべてのレースの中で最も過酷で最も落伍者の多いレースであろう。どんなに自転車とマラソンが得意でも、水泳が苦手な時間以内に岸にたどり着けなければ失格となるし、どんなに水泳と自転車で好調でもマラソンで力尽きれ

ばゴールにたどり着けない。したがってこのレースは完走することだけでも大きな榮譽を得ることになる。そして彼らはアイアンマンともストロングマンとも呼ばれ、その後半生はその過酷なレースの回想から滴り続ける甘い蜜によって豊かさを保証される。だから、ぼくが今、宮古島 11 日間のサイクリングツアーを振り返りながらその回想を書くこの瞬間にも、彼らはぼくのこの甘いノスタルジーの数倍の甘さの陶醉に浸りながら自分たちのレースを回顧しているに違いない。

ぼくはあすはきっとストロングマンたちを応援しようと心に決めた。彼らの走る姿を見ることができれば、「競争する」ことから遠のいてしまったぼくにも再び競争心が湧いてくるかもしれない。ぜひトライアスリートたちの競う姿を目撃しよう。そして彼らの・彼女らの走り去ったあとをゆっくりでも追っていつてみよう。

ぼくは雑誌を閉じると、耳栓をしアイマスクで目隠しして睡眠をとった。さて、今回の旅行の同行者は、技術部の川上氏（ハンドル名としてジャック・アマノを名乗っている）、特許部同僚の石塚君との三人で、ぼくはマウンテンバイク、川上氏はクロスバイク、石塚君はロードレーサーでの参加だ。川上氏は今回の旅行の真ん中の5月1日にトヨタとの合併会社「アドマノックス」へ出向となりその専務となられた。川上氏とは前年の夏にいっしょに北海道道東を走り、石塚君とは一年前のゴールデンウィークに八丈島を走った。ぼくと川上氏とは5月5日までの滞在だったが、友人の結婚式に出る予定の石塚君は2日にぼくらに見送られて島を去った。

ところで今回宮古島を選んだ理由はこうだ。まずゴールデンウィークはたいていどこへ行っても車がいっぱい大量の排気ガスを吸わされ健康によくない。そこでぼくは車の容易に渡れない島を候補にする。去年の八丈島はそうして選ばれた。しかし、5月初旬に八丈島に行ってみると期待に反して泳ぐにはまだ水が冷た過ぎた。水泳を一つの楽しみにしているぼくはそれで今回は沖縄方面の地図を開いた。しかし、沖縄本島は鉄道がないせいで車が多くサイクリングには適さないと地元から来た人から聞いていたので、考慮の対象にしなかった。すると石垣島か、宮古島ということになった。最後にぼくが宮古島行きを決定したのは石垣島に行くには那覇で乗り換えねばならないが、宮古島には直行便が飛んでいるということだった。

航空運賃は宮古島まで往復で約7万5千円かかる。ぼくはそれだけかかるのなら折角だからできるだけ長く滞在したいものだと考えた。ぼくの合理的価値判断によると、航空運賃の経済性は、ある場所に観光の目的で行くとき、そこに行って帰るためにかかる運賃を滞在日数で割ったときの商がいくらかによる。滞在のための基本料金は一日いくらになるか、と見るわけだ。永く滞在するのなら高価な運賃も報われようというものだ。そこでぼくはせっかく遠くへ行くのだから少しでも永く島に滞在するようスケジュールを組んだ。こうして、有給休暇を4日分とって、4月25日（土）から5月5日（日）の11日間の長期滞在を計画した。しかし、この一日でも長くという貧乏人根性がぼくに勇み足をさせた。たいてい往復割引は7日間以内の場合に適用され、

沖縄方面の場合はこれが10日間となる。したがって5月4日に帰ることにしておれば、約1万円の割引を受けることができたのだが、1日の差でぼくらは約8万4千円の料金を払うことになってしまった。しかし振り返ってみて、5月5日の朝の前浜での魚の大群の中に泳ぎ入る感動的体験のために、この最後の日も思い出に残る捨てがたい日となった。では宮古での11日間のどの日を捨てて往復割引をとるかと言われると、ぼくはやはり一日として譲れないことに気づく。フィアンセから、何人子供が欲しいのとたずねられて、11人欲しいなと言うと、11人は多すぎてだめよ、せめて10人にしましょうよ、と言われれば、うん10人でもいいや、ということになるが、11人わが子が生まれてしまってから一人捨てて10人にしようということになるとどれもかわいくて捨てがたいものだ。そして宮古諸島は11日間滞在したぼくらを最後まで飽きさせなかった。

目が覚めると、飛行機は着陸体勢に入っていた。窓から覗くと島が見えた。これが宮古島か、なるほどなかなかいいとこだぞ、と思っているとすぐに通り過ぎてしまいまた海上に出た。通り過ぎた島は宮古の離島の伊良部島である。すぐにまた島の上に来た。これが宮古島だった。飛行機の窓から見た宮古島の印象は、畑の多い平らな島というものだった。あとで、この畑のほとんどはさとうきび畑と判った。まわりの海は浅く、沖のほうでも岩や珊瑚の群が海面すれすれのところにあったり、海面からのぞいていたりして、エメラルドグリーンの海の中に泡立つ白い波がいたるところにそのありかを教えてくれる。この宮古諸島全体が一つの大きな棚の上にのっていることがわかる。このような美しい海に囲まれた島々が日本にもあることがうれしい。

しかし環境の美しさが必ずしもそこに住む人々の生活の豊かさの指標にならない。否、むしろ環境の美しいところは未開地の場合が多く零細の生活を見つけないことが多い。ここでも台風や干ばつによる農作物の被害が多く、苛酷な自然との戦いが繰り返された。今の宮古島は開発も進み不便の少ない島となったが、この島の歴史は現在も保存され観光のポイントともなっている「人頭税の石」に象徴されるごとく島民にとっては薩摩藩や琉球王朝、あるいは島の主により課される重税の下に苦しみ喘ぐ受難の歴史であった。しかし、そのような暗黒時代においてもこの美しいエメラルド色の海は毎日ひねもす宮古の美しい砂浜や切り立つ岸壁に波を打ちつけていたのだ。そしてその波の下には超天才の芸術作品かのような熱帯魚たちがずっと生息してきたのだ。それらの美しさが住民の貧困の苦しみをどれだけ忘れさせ和らげたかは知らない。ぼくはどうしてもこのさまざまな熱帯魚の美しさと島の苦難の時代とをうまくマッチさせてイメージすることができない。ぼくの今までの連想システムの中で熱帯魚はいつも、美しく高価なもの、生きた宝石、従って豊かさと結びついてきたのだ。宝石を散りばめ、美しく着飾った紳士淑女が、必ずしも幸せな人でないように、かつての宮古島はエメラルドの海に囲まれ、星の砂で化粧し、豊かな緑の広葉樹をまとい、いくつかの離島を侍従の如く従えていたが、その実は貧困に苦しむ不運な人々を魂として宿す悲しみの島だった。

宮古島は、沖縄本島の南西約300kmにある宮古諸島の主島である。面積は150平方キロで八

丈島の2.2倍、大島の1.65倍である。三角形の平坦な台地状の島で、山らしい山はなく、最高点は野原岳の109メートルである。しかしこの野原岳、結局ぼくらはどれがそれなのか見極めることはできなかった。台地の上の野原で一番高いところが109メートルだけあるという意味なのだろうか。

飛行機から真先にタラップを降りると、覚悟していたとはいえ蒸れるような熱気に包まれ、ゴールデンウィークの連休でやって来たぼくらは一気に夏休み気分となった。今からこんなでは、7月8月の暑さはどのようなものなのだろうか・・・暑いというよりは熱いにちがいない。

ただでさえ汗だくになることの多い自転車の組み立て作業を、この暑さの中で長袖のウィンドブレーカーを着たまましたので汗が吹き出してきた。すぐ上半身裸になってTシャツに着替えたが、黒地のものだったので太陽光をよく吸収し、まるで砂鉄カイロでできたTシャツを着ているように温かった。

空港のロビーには練習中のトライアスリートたちがレースウェアのままやってきて、その時到着した仲間を迎えていた。ぼくらは、自転車を組み立て、ボトルに水を入れ、記念写真を撮り、追い風に帆を膨らませるヨットの如く、期待に胸を膨らませて空港を出走した。するとすぐに、レースに備えて最終調整をするレーサーたちを見かけた。そしてコースとなる道のわきには選手の名前と激励文を大きく書いた白地の横幕がたくさん見られた。昼がかなり過ぎてぼくらは昼食のパンや牛乳を買うために店に入った。レースパンツをはいたぼくらの姿を見た店のおばさんが笑顔で、あすのレースは頑張ってね、というようなことを地元の言葉を交えて言う。おばさんとしては精一杯に標準語を使おうとしているのだろうが、すぐには意味がとれなかった。ぼくらはすぐにレースには出ないのだと弁解した。特にこの島ではトライアスリートたちはヒーローとして尊敬されるので、ぼくらは冗談でもトライアスリートの振りをすることををはばかった。またそれと同時に、この島に限らずどこでも多くの皮肉者たちは、（それはぼくらが会ったあるトライアスリート自身もそう告白していたのだから全くの的外れでもなさそうなのだが）、トライアスリートたちは単なる馬鹿ではなかろうかと言う。ぼくらは笑顔のおばさんがどちらにくみするにしても、トライアスリートの振りをすることををはばかった。

この日会う人のほとんどは、ぼくらに同様の激励の言葉を掛けてくれ、そのたびにぼくらは応援するだけだと弁解し、また、レースが終わってからは今度は、「完走したか」「何位だったか」「来年もまた来るかね」などと聞かれ、そのたびにぼくらはトライアスリートでないことを釈明するのであった。現地の人がぼくらを地元の間人と思って話してくるとき、たいてい二三度聞き返さないと意味がとれない。若い人なら問題はないが、年配の人の場合は、なかなか意志疎通がスムーズにはゆかない。地元の人どうしが話しているのを横で聞いていると全く意味の判らないのが普通だ。

ぼくらが最初に海辺に出たのは与那覇前浜（まいばま）ビーチだ。ここには東急リゾートホテルがある。沖縄県の全諸島を見て回ったある人たちはここを沖縄のナンバーワンビーチとして選んだ。白砂が4キロにわたって続く規模とその砂の質が決め手となったという（「沖縄35島」真島満秀、加藤庸二共著；桐原書店）。ぼくらはこのビーチに自転車に乗ったまま侵入してきたが、砂にすぐにタイヤをとられてしまった。ぼくらは木陰で砂の上に座って昼食のパンを食べた。ここの細かい白い砂は砂時計に使われるもののように液体のようにさらさらして肌触りのいいものだった。1. 5キロほど沖に来間島（くりまじま）が横たわっており、その島へこちらからの架橋工事が進行中で、ほぼ2／3ほどが完成していた。

ここでは、水泳の練習をしているトライアスリートが5・6人いた。恐らく、彼らはスウィムが一番苦手なのだろう、あすの本番でもしかしたら規定時間以内に岸に戻ってこれずスウィムで早々に失格になるというおそれが強く、その後の自転車とマラソンの練習をいくらしても無意味になってしまうという悪い予感を抱いていたのだろうか。ぼくはひとり波打ち際まで歩いてゆき、そこで波に濡れた砂を両手でつかんでみた。何というきめ細かく柔らかい砂だろう。しばらくぼくは砂をつかんだままで宮古島での初めての感激が両の掌から身体にしみ込んでゆくにまかせた。

川上氏は昨夜、自宅で旅行の準備をしながらウィスキーをちびちびやっていたつい深酒をしてしまい、旅行の初日は二日酔い気味で、それに加えてこの急激な温度環境の変化によっていつもの元気がなかった。前浜を出発してからしばらくして道に迷った。先頭を走る川上氏が三叉路で自転車を止めた。「休むぞ！」「今度の旅はのんびりやりましょう」「そうしょうや」川上氏は木陰にすわり、タバコをふかしながら地図を広げた。石塚君はズボンが汚れるのが気になるのか決して地べたに直接すわらない。ぼくは、川上氏のそばにすわり、彼の指が地図の上を滑るのを見る。彼は地図の上でぼくらの現在位置を見つけようとしている。石塚君はそれに何の興味も示さない。彼は始めからすべてをぼくらに任せているのだ。そして、ぼくもこのあたりでこれからの行程は川上氏にすべて任せようという気になっていた。いや、むしろできることなら三人とも地図をすべて捨て、ぼくらの野性の導くままに走ってもいいと思った。どんなに道に迷っても、宮古島からさまよい出ることはあるまい。あるいは地図に頼ってでは決して到達できないユートピアのごとき秘境にさまよい込めるかも知れない。

ぼくは今回のツアーを旅というよりは生活と考えていた。雨が降れば一日中テントの中にこもってのんびりしてればいい。眠くなれば寝、目が覚めれば横になったまま読書でもすればいい。ぼくはさらに仕事をする用意もしてきていた。今これを記述しているOASYSの文字通り背広の内ポケットに入るワープロ "Pocket" は、こういったツアーサイクリング中にも仕事をするのを可能にしてくれる。ただ、テントの中で寝そべってキーを打つのは難しい。ぼくは、学生だった20年くらい前に travelling workerの夢を持っていた。まずぼくの職業種は科学技術分野の翻訳だった。そして各地の宿を転々としながら、住所不定の状態で仕事をするわけだ。宿で仕事をした

り喫茶店、図書館、あるいは公園で仕事をしてもいい。翻訳が出来上がれば依頼主に郵送する。収入は旅費と宿代と食費が稼げればいい。こんな人生をぼくは真剣に考えていた。そして、今初めて宮古島で寝場所を転々としながらポケットワープロという利器を持って travelling workerのまねをしようとしている。しかし、宮古島での11日間は余りにも充実しすぎていて仕事に気持ちが向くひまはなかった。

その日ぼくらは、友利という村から坂道を海のほうに下ったところにあるインギヤーという海泉の湧く小さな内海の畔でテントを張った。そこは全体が公園になっており、すぐそばに3・4分で登れる小さな丘があり、その頂上には展望台がありその屋根の上にはなぜか牛の像が立っていた。翌朝ぼくがひとりで散歩していて見つけたのだが、この丘の反対側はキャンプ場になっていて、水道やバーベキュー炉の設備もあった。しかし、そこには夜通しそこでたむろしていたに違いない高校生らしい5・6人の男女が酒を飲んでいてあまりいい雰囲気ではなかった。

夕食後、ぼくと石塚君がヘッドランプで道を照らしながら近くのシャワー設備のあるトイレに向かっていると、大きな甲殻類の生物に遭遇した。カニにしては甲羅がなかったのでぼくは大きなエビかと思った。あまりに珍しかったのでぼくはすぐ引き返し、生物に詳しい川上氏を連れて再び現場に戻った。エビであれば捕まえて食べようと提案した。彼もそれは初めて見るらしかったが、さすがに博識者、すぐに椰子蟹（ヤシガニ）だと特定した。そしてエビが海からは上がってくることはまずないと付け加えた。ぼくが前から近づくとそのヤシガニは大きなはさみをかかげてこちらを威嚇した。そこで後ろ側に回って背中をつつくと、あわてて草むらに逃げてしまった。その後もう二度とその種のカニに出合わなかったのも、あのヤシガニを写真にとっておくべきだったとあとでぼくらは残念がった。

実はこのヤシガニ、後で調べてわかったのだが、宮古の味の王様と呼ばれている美味の甲殻類動物で一番近い親戚はヤドカリであるらしい。従ってカニの味ともエビの味とも違う、ヤドカリの味がするらしい。そのまま丸ごとゆでて食べるもので、特にお尻のところのミソがとろりと甘いという（'92 るるぶ沖縄）。お尻のミソがおいしい点ではカニ類もそうだ。が、読者諸氏よ、もしかしてこの傾向は甲殻類にとどまらず、もっともっと普遍的なものではなろうか？我々はもっと研究熱心になっていろんな動物の「お尻のところのミソ」を試食してみるべきではなからうか？

ところでヤシガニはその美味のため捕まえて食べる人が多く、しだいに数が減ってきているということだ。しかし味覚に関しても好奇心の旺盛なさすがの川上氏も、「あまり旨そうじゃねえな」と食する気が起こらなかったくらいの異様な様相を呈していて、旨いものは旨そうに見えない、という自然の保護の鎧を授かっていた。最初に食べた人は勇気ある人であったろう。いや実情は、飢えた人間のすさまじい食欲にはヤシガニも兜を脱がざるをえなかった、というところだろう。そして一旦味をしめると人はもう容赦しない。北海道の毛ガニしかりである。なおヤシガニという名がつけられているが、ここにはヤシはないので、ここのはアダンの木に登りその実を

好物とする。

ところでシャワーのことに少し言及したが、宮古島には至るところに海水浴場があり、そのほとんどにシャワー室付きのトイレの設備が有るので、その近くでキャンピングすれば水道も使えて便利だ。そしてぼくらはほとんど毎日寝る前にシャワーを浴びた。温泉はもちろん銭湯もないこの島では冷たいシャワーは欠かせない。

4月26日（日）

目が覚めるとすぐぼくはテントから出て、インギヤーの内海の畔を一周しようと岸沿いに散歩した。水辺にいた魚たちはぼくの足音で逃げてゆく。浅い底をよく見ると、砂がこんもりと小さく盛り上がっているのがいくつもある。そしてそのてっぺんに小さな穴がありそこから泉が出ているようだった。これが海泉の正体らしかった。やがて切り立った山肌がせまり、水の中に入らないと先に進めないような所に来たので岸辺を外れ、草むらをのぼり小さなアスレチックフィールドを越えて丘の反対側に出た。そこのキャンプ場で前述したように昨夜より朝まで徹夜でいたらしい少年少女の一群に遭遇した。彼らはあずま屋のテーブルを囲んですわり、その真ん中に1／4くらい中身の残った泡盛の一升瓶をおいて飲み食いしていた。中に妙に馴れ馴れしく話しかけてくる少年がいて、ぼくがそばを通り過ぎようすると、きょうはトライアスロンに出るのかと聞き、そうでないと言うと、一杯やっていかないと誘い、断ると、電話してねと言って電話番号を言った。すると他の者たちもアッハッハと笑った。悪意のある連中ではないのだが、こちら側でテントを張っていたら安眠できないところだった。ぼくは、こんどは丘の海側のふもとの道を通してテントサイトに向かった。この辺の海岸は前浜とはうって変わってごつごつした岩がたくさんあり、それらは溶岩と思われた。漁をしている男性がひとり槍を手にし発泡スチロールの大きな板をひもで引っ張りながら沖のほうへ泳いでいっている。内海のほうではダイバーがふたり潜っている。

今回のぼくらのツアーの目的は、透明度の高い海を楽しむもので、海辺でののんびりしたテント生活に都会で味わえない喜びを体験することにあつた。サイクリングよりもスウィミングのほうが目当てだ。そこでぼくは朝食をすませると、小さな湖のような内海に入ってしまった。最初は冷たいと思ったがすぐに慣れると水の中も気持ちよい。海泉が湧くだけあってこの水はあまりしょっぱくない。海草が多いので小魚がたくさん集まってきているようだった。

海に近い岩場のほうに泳いでゆくとついにめぐり会った。最初に見つけたのは、輝くようなコバルトブルーの小指くらいのサイズの魚で岩のあたりを漂うように群がっていた。これらは近づいていっても逃げない。つかもうとするとやっと決心したかのように岩の反対側にゆく。この種はどこへ行っても見かけたので、とうとう宮古島を去るころには見飽きてしまいゴミのように思うようになった。さらに泳いでゆくと、近づくといやがって岩かげに隠れるが決してその岩から去

ろうとはしない掌くらいの美しい熱帯魚がいた。そばには体は黒いが顔だけオレンジ色をしたのがちょろちょろしている。（ぼくは川上氏のように博物マニアでないで、これらの魚の名前を知らないし、また教えてもらってもすぐに忘れてしまう。）これら熱帯魚たちはどうやら決まった岩に住んでいるらしく、行動範囲は岩のまわりに限られているようだ。しつこく追うと、岩にできた穴に入っていく。すばやく遠くへ逃げるのは、いつも大小の群れを成して泳ぐうまそうな魚たちだけだ。それらは岩に住んでいるのでないらしく逃げると戻ってこない。「うまそうなのは襲われる」太古からの経験則がそれらの魚の本能にインプットされ遺伝子に組み込まれて受け継がれているのだろう。逆に、熱帯魚は襲われないと知っているのか、神経質な逃げ方をしないので余り近づかなければゆっくり鑑賞できる。

熱帯魚の美しさについては読者諸氏も水族館等で十分堪能されていようからあえて詳述しない。むしろ適切な照明を当てられて水槽の中を泳ぐ熱帯魚をガラス越しに見ていたほうが、その美しさをより満喫できるだろう。しかし、魚たちと一緒に泳ぎながら彼らを鑑賞することには水族館等では体験できない魅力がある。この魅力を的確に表現してくれているのが以下の引用文だ。これは青木恵哉著「選ばれた島」（新教出版社）から得た。

『渚の岩に立てば降り注ぐ陽光が海底まで通り、珊瑚礁のあいだを遊泳する色さまざまな熱帯魚の美しさはたとえようがない。・・・沖縄の海は清澄で美しい。水中眼鏡をかけてとびこむと、あらゆる色と形、静と動とが完全な調和を保ち、その美しさは呼吸するために顔を水面から上げるのさえ惜しいくらいである。』

海の中には人の手でなく神の手により調和された文字通り息もつかせない美しさが展開しているのだ。

さて、ぼくらが入手していたトライアスロン・コースポイント通過予想時間表によると友利あたりに先頭の自転車がやって来るのは１０時半くらいだった。そこでぼくらは１０時ごろにインギヤーを出発した。途中道に迷い、さらに鉄砲玉のようにあらぬ方向に走って行った石塚君を追いかける一幕もあり、やっと１１時頃に太平洋側の村である吉野あたりで初めて自転車で駆け抜けるトライアスリートたちを見つけた。とおにトップグループは通過していた。ぼくらはしばらくそこで応援した。そしてぼくらも彼らと同じ方向に進むことにした。めざすは東平安名岬（あがりへんなざき）だ。（ちなみに、東を「あがり」と読むのは太陽が上がるのが東だからで、日の入る西は「いり」と読む。）

レースの邪魔にならないよう歩道側を走ったが、水やバナナ、オレンジピースなどを選手に渡すエイドステーション等は歩道をふさぐように設置されていたり、それらの物を補給するための車などが歩道をふさいでいたので、そういうときは車道に出た。すると道端に旗を持って並ぶ部落総出にちがいない老若男女の応援団がぼくらにも頑張れとおしめない声援を送ってくれた。ぼく

らは手や旗を振って声援に応えた。

片手に持ったウォーターボトルから水を飲みながらぼくらを追い越してゆくトライアスリートたちに「ファイト！」とか「頑張ってください」などと言って励ましていると「サイクリング頑張ってくださいね」と逆に励まされたり、「どちらから来たのですか」などとたずねてくる余裕派もいた。

ぼくらが東平安名岬の突端に着くころには、もうレースの最後尾あたりの連中がやって来るようになり、女性レーサーも多くなった。道端にはレーサーたちが捨てた空になったウォーターボトルやバナナの皮、スポンジなどが転がっていた。ボトルを拾ってみると、真ん中に宮古島の略地図が三角形の中に描かれその中に"STRONG MAN"とあり、上部には"MIYAKOJIMA APRIL 26, 1992"そして下部には"THE 8TH ALL JAPAN TRIATHLON"とあり、三角形の三辺の外に泳ぐ人、自転車をこぐ人、走る人の略絵があり、その下にそれぞれ 3km, 155km, 42.195km と記されてあった。ぼくは記念に一つもらって帰ることにした。そして川上氏は食器を洗うときに役に立つとスポンジも二つくらい手に入れた。

さてここでぼくは読者諸氏にクイズを出させてもらおう。このトライアスロン・レースは朝8時に美しい前浜をスタートし3キロのスイム、155キロのバイク、42.195キロのマラソンと続く。この全行程を夜の10時までに完走しなければ失格となる。では質問。トップでゴールインした人は何時頃にテープを切ったでしょうか？

答えは3時半頃。すなわち第一位完走者と最後の完走者とで6時間半の差が生じるわけです。チャンピオンは7時間半の苦しみを経たのちに栄光の座に付き、最後の完走者はその倍近い14時間の苦しみののちやっとゴールインする。そして途中で失格したり棄権したりで永遠にゴールインできない者たちも大勢いる。

この過酷なレースは人生の苛酷さをも示唆していないだろうか。「参加することに意義がある」とよく言う。この「参加」の意味はこの種のレースの場合完走することであろう。しかしタイムリミットを刻む時計の秒針に追い越されてしまった者は失格してしまう。トライアスリートたちは腕時計を見ながら自分の持ち時間があとどれほど残っているか、その時の迫るのを知ることができる。しかし人生においてはわれわれは自分のタイムリミットを知るすべを持たない。なんと多くの人たちが苦しみ喘いだのちにやっと栄光のゴールを眼前にし、歓喜した瞬間、冷酷なストップウォッチの秒針に心臓を串差しにされてしまったことか。トライアスロンはサバイバルレースだ。最後まで倒れてはならない。生き残ること。人生も同じ。苦しむことと生き残ることが等号で結ばれた苛酷なレースなのだ。

しかしトライアスリートたちよ、君らはなぜにその苦難に満ちた人間の運命を縮図にしてぼくら

や沿道の応援者に演じてみせるのだ。ぼくらに何を警告する必要があるのか。それともその縮図の中に注視すれば発見できる救いでもあるというのか。君らの苦しむ顔に他では見られない美しさが表われるとでもいうのか。追う者よ、逃げる者よ、競う者たちよ、こんな素晴らしい自然の中をなぜそんなに喘ぎ苦しみながら急ぐ。君たちの縮めた時間を僕たちツアーサイクリストは、また元通りに引き延ばしながらのんびり進んでゆく。ぼくらには君らの受ける人々の声援はない。約束された栄光もない。しかしぼくらは、鳥の声を聞く、川の流れる音を遠くにも近くにも聞く、腹が空けばペダルをこぎながらでなく木陰に腰をおろして食事する。追い抜かなくてはならない人も、追い抜かれてはならない人もいない。ただ、日の沈むまでに寝場所を見つければよいのだ。

ぼくらはコースに沿って東平安名岬の突端までゆき、最終走者の折り返して行くのを見送った後、あたりを散策した。折り返し地点のエイドステーションでは民謡がスピーカーから流れ、民俗衣装を来た若い女性が二三人いて南の島の雰囲気を作り上げていた。子供たちが選手の投げ捨てたウォーターボトルを探しており、水が入っているのを見つけたといって喜んでいる子もいた。しかし選手たちが皆去ったあとは、エイドステーションの人たちは子供たちを交え、ピクニックを始め、バーベキューや焼きそばを作りはじめた。彼らは仕事が終わったのだ。この細長い岬は1周目だけ選手たちはピストン走行するが、2周目はもう岬には進入しないで通り過ぎてゆくのだ。

この岬の端に立てば333度の中心角を持つ扇形の海を見ることが出来る。水平線はその円弧だ。足元の岩はみな溶岩だった。おそらく海底火山の噴火によってできた島なのだろう。海にもこのような粗く多孔質の岩がたくさん転がっていた。川上氏が本土にはいないハエくらの大きさのセミを見つけた。木に止まるのでなく草の葉に止まっていた。彼は去年北海道をいっしょに走ったときも北海道にしかない蝦夷ゼミを見つけた。博物学者であつたご尊父に恥じず、彼も動植物に関する観察眼が鋭い。ぼくはここで彼に博士号を授けることにした。

東平安名岬の付け根付近にある三叉路にもどると、そこのエイドステーションでそろそろ2周目のトップが近づいているということだったので、ぼくらはそこでしばらく観戦することにした。トップは去年優勝したというパドリだった。しかし彼は自転車とばし過ぎたらしくあとのマラソンで去年2位だった宮塚に追い抜かれて去年の順位が入れ替わることになる。

ぼくらは、勢いよく通過してゆく選手たちの姿をしばらく時間の過ぎるのも忘れて見ていた。やがてぼくらはレースの邪魔にならないよう海岸沿いの道を進み、再びレースコースと合流するところでパンとおむすびとビールの昼食をしながらレースを観戦した。さらに、そこから下に見えた魅力的な砂浜に下りてゆき1時間近く泳いだりした。遠くまで浅いので、泳ぎが不得手で海で泳いだことがまだないという石塚君も安心して水に入った。ただ彼は水着を自転車のところに置いてきたので、ふるっちんだった。そうだ、彼は処女航海にふさわしく一糸まとわぬ姿で進水し

くまなく塩水の洗礼を受けたのだ。

ぼくらは泳ぎ終わると、坂道の途中にあった冷泉をコンクリートでプールしているところで体を洗った。ぼくは石鹸で頭もシャンプーした。しばらくつかっていると冷たさにも慣れ、露天風呂につかっている気分になった。このような泉は、島のいくつかの切り立った断崖の下に見つけたが、水道がまだなかった頃には、島民は急で危険ながけ道をおりてこのような泉に水を汲みに来たのだ。そしてこのコンクリートのプールはなにも水浴をするためのものではなく、複数の人が一度に洗濯したり、水を汲めるようにするためのものだ。

上に登って休憩所のベンチで再びのんびりトライアスロンレースを観戦した。ぼくらが泳ぎにゆく前にこのベンチには若いアベックがいたが、彼らの去ったあとになぜか南西航空の毛布が置かれてあった。おそらく彼らが飛行機から持ち出してきたものであろう。このままここに放置しておけば風雨にさらされ貴重な資源を損失してしまう。そこで川上博士はこれを有効利用すべく携行することにした。今回彼もぼくもシュラフは持参しなかった。ぼくは羽毛のテントシューズやシュラフカバーを用意していたのでテントの中で寒いと思ったことはなかったが、博士は朝寒かったと言い、その後はこの毛布のおかげで快適なテント生活を送れることとなった。

しばらくして2周目の最終ライダーである女性選手がやってき、そのうしろからレスキューバンが「これが最終走者です」とスピーカーでエイドステーションの人たちに伝え、「ご苦労さまでした」と労をねぎらってのろのろと通過して行った。東平安名岬の突端で1周目の最終ライダーだったある初老のおじさんはもういなかった。あの時ぼくらが岬の突端のトイレで用を足し、ボトルに水を入れて出てくると、このおじさんは道わきにロードレーサーを止めた。ぼくらはコースはあっちですよと教えてあげたが、彼は「ここはトイレですか」とやはり用を足しに入ってしまった。するとまもなく最終ライダーとその後続くレスキューバンが通り過ぎていった。そしておじさんは幻の最終ライダーとなってバンを追って行ったのだった。しかし2周目にはその幻ももうなかった。

その後ぼくらは、トライアスロンの自転車コースをたどって東平安名岬を後にした。やがて雨が降り始めた。これはトライアスリートたちには好都合であったに違いない。しかしぼくらにとってはつらい雨だ。ある坂を上りきったところで自分たちが今どのあたりにいるのかわからなくなり、地図を見てもみることにした。しばらくじっと地図をにらんでいるとさすがに寒くなってきた。ぼくはステンレス製真空断熱ポットに湯を入れていることを思い出し、博士に紅茶を飲んで休みましょう、と提案した。この紅茶、博士が愛飲するところのもので、東京でたくさん買って持参した。彼は頻繁に湯を沸かし、特に朝は必ず3人分の湯を沸かすことが彼の一日の最初の日課で、この紅茶を防水袋から取り出しストレートで飲んだ。いつもぼくらにも分けてくれたので、ぼくも旅行が終わるころには少々ストレート紅茶を愛好するようになってきた。さて、この小雨の中で飲んだ紅茶は最高だった。そしてぼくはこの何の変哲もない一時のことを、まるで

もうずっと前のことのようにその後の宮古でのサイクリング旅行の間何度もなつかしく思い返した。

ぼくらはトライアスロンのコースに沿って進んだので、その朝いた友利に再び戻ってきた。いったんやんでいた雨が再び降り始めたので、時間はまだ早かったが、知らないところへ行って雨の中を新たにテントサイトを探すよりは、ぼくがその朝見つけたインギヤーのキャンプ場に行くことにした。食料は友利のスーパーマーケットで買い、焼き肉主体の料理をすることにした。

キャンプ場に着いた途端、雨足が激しくなったのでぼくらは屋根とベンチのある所に入って様子を見た。そこはゲートボール場の細長い休憩所で、海側に一棟と山側に一棟あり、ぼくらは後者にまず逃げ込んだ。最前までゲートボールをしていた10人くらいの中年男女が、雨が降りだしたので山側の棟でバーベキューの用意を始めていた。そこでぼくらは海側の棟に自転車を移し、荷を下ろした。雨が再び上がると博士は水道が近いということで、20メートルくらい離れたところにあるあずま家のほうに荷を移動し、今夜はそこでテントを張ると決めた。そこはしかし3人でテントを張るには狭いようだったし、その朝そこでたむろしていた例の少年少女らが一升瓶を割ったらしくガラスの破片がコンクリート床の上に散らばっていて、ぼくは海側のゲートボール休憩所でテントを張ることにした。石塚君のテントはコンクリートの上に張るには大きな石を6個運んできて、それでペグを固定せねばならないので、土の上に張れる休憩所のほうに来て、ぼくの隣にテントを張った。やがてスコールは止んだ。

その夜も、材料を買い過ぎていて、食べきれず、残りものを翌朝の朝食のために取っておくことになった。しかしそれでも食べきれないほどであった。米は水の加減がうまくゆかず、その夜も前夜と同じく、柔らか過ぎるのだが底の部分は少し焦げているといった具合だった。

4月27日

未明、ぼくはすさまじい声を聞いて目を覚ました。それはカタカナで表すなら「オギャー、オギャー」という大人の男性の威嚇的な叫び声だった。途端にぼくの上半身がガタガタと震え始めた。眼を見開き、起き上がろうとしたが体が金縛りにあったように動かない。ぼくは「やられた、もうこれでおしまいだ」と悟った。こういう場合テントの中にいる者は無防備の不利な状態に置かれていることになる。その狂気と悪意を帯びた攻撃的叫びはすぐこちらに襲いかかってこようとする勢いを持っていた。声の方角からすると、川上博士がまずやられただろう。そしてすぐに石塚君とぼくのテントがめっちゃめっちゃにされるだろう。逃げようにも動けない。からだは震えるときには硬直してしまい、それで特に上半身が一枚の板になったかのようにうまく震動する。しばらくこの状態が止まらなかったが、狂気の声はすぐに聞こえなくなっていた。ぼくはそのままじっと金縛りの解けるのを待った。風でテントの天井が左右に揺れているのが見える。

夢というにはあまりにも大きな声だった。ぼくはこのような大声を夢の中で聞くことは今までになかった。そして、もし夢なら、目が覚めたときに、どういうストーリーがあってこういう眼の覚めるような経験をする事になったのかを思い出せるはずだ。目が覚めた直前の夢は容易に思い出せるからだ。そして声の主も誰であるかだいたい見当がつくはずのものである。しかしこの時の声は何のストーリーもなくやぶからぼうに襲ってきた。従ってぼくは何の夢も見えていなかったと信じられる。いわばぼくの夢テレビはスイッチオフの状態になっていたのだ。従ってあの声は現実の声だったのだとぼくは思った。やがて金縛りは解け、ぼくは起き上がった。ぼくは恐怖の経験ののち立腹していた。あの野郎ただではすまないぞ。しかし同時にまだ身の危険も感じていた。まず、川上博士の安否を確かめねばなるまい。今やられている最中だとしたら早く行って助けねばならない。ぼくは恐るおそるテントのチャックを開けた。海岸を打つ波の音と木の葉を揺する風の音だけが聞こえる。ぼくは素早く外においてあった運動靴をはいた。そしてテントの中から唯一の武器であるナタを取り出した。そばの石塚君のテントはドルフィン型のもので馬蹄形に曲げられたグラスファイバーのポールで幕が膨らまされている。しかしこのポールの一箇所が折れており、骨の折れた傘を開いたときのような情けなさを漂わせていた。しかしこれは最初の夜、彼がテントを設営するとき失敗して折ってしまったものだ。ぼくは、20メートル先の吾妻屋の川上博士のテントを見てみた。星明かりにぼんやり彼のテントは見えた。どうやら壊されてはいないようだった。しかし、念のためにぼくはそこまで行ってみた。テントの外に人の気配はなかった。やはり夢だったのだろうか。ぼくは安堵したが、不可解な気持ちが残った。テントに戻って横になったぼくはしばらくこの不可思議な経験を反芻してみた。しかし、なんら納得のゆく説明がつけられなかった。悪霊がぼくだけを襲ったのだろうか。

朝、紅茶を飲みながらこの話を二人にすると、川上博士はぼくの近づいてきた足音に目を覚まし、それは覚えている、なんだ君だったのか、しかし叫び声は聞かなかったぞ、と言った。石塚助手はずっと熟睡していたようだ。博士はこのあたりの霊がぼくだけを訪れたのだろうと解説した。そして、ぼくがそういう霊に敏感な能力を持っているからだろう、とも付け加えた。

宮古島とその辺りの離島を訪れるならすぐ気づくことであるが、どの家にもシーサーと呼ばれる、陶器の魔除け唐獅子が門や家の玄関の両側に置かれている。これらはみなこわい顔で睨んでいるので、本土の神社等の狛犬の石像の親類である。のちに渡った離島の大神（おおがみ）島では、貧しそうな構えの家では、陶器の唐獅子の代わりにヒトデのように角を放射状に突き出した、名前を知らなければ鬼貝とでも名付けたくるような威嚇的な様（さま）の大貝をシーサーとして入口の両側に立てていた。（あとで書物により、これはスイジ貝というものと知った。水の子形をしていることによる。）。さらにどの島でも少し注意するなら気づくことであるが、ほとんどの家の壁の下部には「石敢當」という三漢字が刻まれていたり、あるいは路角にそのように彫られた石塔が立っている。博士が地元の人に尋ねたところでは、これも魔除けのまじないであるという。その後調べた書物によると中国の豪傑の名ということだ。ではなぜこの土地ではこのように神経質なまでに徹底した魔除け処置をとるのであろうか？この傾向はこの土地のどういう現象を反映しているのであろうか？その後ぼくは二度と同様の霊の訪問を受けなかった。

（この旅からかなりたって読んだ戸井昌造著「沖縄絵本」からの引用：

「ガジュマルの木にはキジムナーが住んでいるような...キジムナーは海の神様の落ちこぼれで、

ムシャクシャ赤毛の童子だそうな...キジムナーは海のタコと人のオナラが苦手なそうな...キジムナーはいたずらもんで、寝ている人にとりついて金縛りにしてしまうような...」

さては、ぼくが寝る前に排便した木陰の水辺にはカジュマルの木が立っていて、そのキジムナーが気を悪くしてぼくに仕返しをしたのであったろうか？)

しかし、ぼくは27日未明の経験を今では感謝している。眼鏡などにこびりついたとれにくい汚れは超音波をかけて震わせて遊離させ落とすように、あの威嚇的叫び声はぼくを震わせ、ぼくの精神にしがみついていた臆病なものをおおかた離散させてくれたようであった。あの恐怖のあとにぼくが抱いた怒りは、これからぼくが経験するいかなるおどしのあとにも必ず頭をもたげ、けしからぬ者にぼくをけしかけるであろう。

その朝は、川上博士も石塚助手もいっしょにインギヤーの内海で泳いだ。その後、熱帯魚を探して海水に潜るのはほとんど日課となった。博士は当初、カヌーを借りたり釣り具を借りたりして海の楽しみを満喫しよう、と提案していたが、この素晴らしい海の中をかいま見てからは、もう潜ることに専念することにしよう、と考えを改めた。ぼくはもう一つ欲を言うと、サザエやタコを捕まえて、おかずにするのを望んだが、これらは自然にはお目に掛かることはなかった。海の中ではこういうのは専門家でないと簡単には見つけ出せないらしい。旨いものは自然に保護されているのだ。

水から上がりシャワーを浴びたのちテントをたたんでいると、数人の男性が車でやって来てゲートボール場にポールを何本か立て始めた。彼らの持っている細長い袋は中にライフルが入っているように見えた。そこでぼくは、射撃の練習ですか、とひとりに尋ねた。しかし笑いながらその人は「グラスゴルフ」と言った。そして袋から彼が取り出して見せたのは全体が木製のクラブだった。これはその後この地のいたるところで見受けられた。そしてこの競技は大人だけでなく子供もプレーしていたので、ゲートボールの敬老のイメージがなく、ゴルフの金権イメージもない。これならぼくもやってみようかなという気にさせる。やがて体力が衰え、自転車を入れた巨大なショルダーバッグを担げなくなったら、ぼくもキャンピングサイクリストをやめ子供たちとこの草ゴルフを楽しもう。そして、ゲームのあと家に帰ってビールの栓を開け、「波のたわむれ」「雨音のしらべ」「小川のせせらぎ」「虫のセレナーデ」「野鳥シリーズ」などの自然録音CDのひとつあるいは二つ以上を組み合わせるBGMとして流しながら、サイクリング旅行記のどれかをゆっくりと読み返す。ゆっくり読むのは、何度も文字を追うのを中断して、宮古島や、北海道、信州、九州などの現地を記憶の手すりをつたいながら再び訪れるからだ。・・・黄金の回想。

さて今回のトライアスロンレースに関して、ひとつ不可解なことがあった。コースポイント通過予想時間表の地図を見ると、宮古島の北端には、池間島をはさもうとするかのようなカニのはさ

みに似た二つの岬が延びており、一つが世渡崎、もう一つが西平安名岬である。スウィムの後、前浜で自転車に乗ったトライアスリートたちはまず一路北に向かい離島の池間島を目指す。地図の自転車コースを追うと、世渡崎から池間島に線が延びている。そして池間島折り返し点でターンして再び世渡崎にもどる。しかし、ぼくらが空港で得たレンタカー会社の地図にも、この通過予想時間表の地図にも池間島と世渡崎との間に橋などはかかっていないのだ。いくら浅いとはいえ海を自転車で渡るのは無理だ。ぼくらはこの謎を解き明かすためにも宮古島の北端世渡崎を目指すことにした。

ぼくの持参したプリムスバーナー用のガスが早くも不足してきていたので、途中平良市市街地で購入するためいろんな店を訪れた。しかしどの店にもなく、とうとうぼくらは炭を一袋買った。そしてぼくはさらに釣具店で缶入りの固形燃料を購入した。これらはどちらものちに役に立っし必要だった。固形燃料を消費したあとの空缶と炭との組み合わせがぼくらの自炊生活をサポートしてくれた。なお、博士のピークワンはその朝、全体が炎上してスクラップとなっていた。こうしてぼくらは文明生活からまたさらに一步遠のいていった。そして遠のけば遠のくほど、ぼくらの野性は牙を剥いて貪欲になっていった。

ところで、トライアスリートたちがいかにして池間島に渡ったかの謎は、平良市街で見つけたあるポスターで解けた。そのポスターは、ある地元出身の男性演歌歌手の新曲発表コンサートを宣伝するもので、その新曲の題もずばり「池間大橋」というもので、開通式に人々が立派な橋を歩いて渡る写真も載っていた。この年の2月に開通したばかりで、それも架橋工事が始められて1年足らずで完成したのだった。それは海が浅く、しかも底が硬質の岩礁よりなっているので、橋よりも高架の高速道路を作るに近い技術で間に合うのだろう。いずれにしてもこの橋が2月にできたことも考え合わせると、宮古島の一大イベント、トライアスロンが架橋のひとつの動機になっていることはまちがいない。同様に前浜から来間島に建設中の橋も来年はトライアスリートたちを来間島に渡すことであろう。

さて橋でつながったので池間島はもはや離島ではなくなった。強い風に煽られながらぼくらは島に渡った。橋の世渡崎側にも池間島側にもそれぞれ公園があった。そしてどちらにも砂浜もあった。橋のどこから海を見下ろしても必ず底が見えた。それは水がきれいだからというばかりでなく実際に浅いのだ。隣の西平安名岬からでなく世渡崎から橋が架けられたのはこちらのほうが海が浅いからであろう。同様に、来間島への橋が前浜ビーチからの最短のコースを取らないで、皆愛から斜めに延びるように架橋されようとしているのも、浅い棚部分を示す地図を見るならその理由は一目瞭然となる。浅いところを利用したほうが架橋がずっと容易だからなのだ。

西平安名岬といえば、ぼくらは池間大橋を渡りながら風力発電のための大きな風車を見た。まだ政府から許可が下りていないため試験運転の段階で、本格的運転はなされていなかった。東平安名岬の付近では太陽発電の試験場があった。山がないためほとんど川らしい川のないこの島では

水力発電はできず、火力発電のためのオイルも採れない。すべて他よりエネルギー源を頼らねばならない。しかし強力な太陽光と、強風には恵まれている。これらを利用して電力を得るならばこの島々は潤いを増せるであろう。

ぼくらは、まず港にハンドルを向けた。「ありがとう、池間丸」と書かれた横幕をつけたままの古びたフェリーボートが岸壁に横付けになっていた。ここに来る途中には、「祝、池間大橋落成」という横幕を見かけた。さっそうとデビューしたスマートな大橋、そしてくたびれて引退する錆びたフェリーボート。橋ができるまではこの船は島の生命線だったに違いない。島民は公園がどこかに保存するのだろうか。ぼくは、新曲演歌「池間大橋」の中に一言でも「池間丸」の名が出てくるのだろうかと思った。

この漁港は地形の利を生かした良港であった。ぼくは漁業組合の人と掛け合って一匹魚を売ってもらった。名を聞くと「暴れん坊」ということだった。ピンク色をしていた。組合の人は親切に刺し身包丁で身を切ってくれたのでぼくらは新鮮な刺し身にありつけた。その間に川上博士は沖縄産の「オリオンビール」を買ってきていた。石塚助手に醤油とワサビを買いに行かせると、そこには醤油はキッコーマンのLサイズのボトルのものしかなかったので彼はそれを仕方なく買ってきた。ぼくはその後、腰バッグのウォーターボトルを差し込むポケットにこのボトルを差し込んで持ち歩いた。スーパーマーケットなどに入るときは自転車のそばにおいてから中に入った。皮肉なことにその後醤油を必要とする料理は殆どしなかったので、殆どが余り、最後のテントサイト前浜のキャンプ地に置いてきた。

さて、その夜のテントサイトは大橋のたもとの公園にした。シャワー設備はなかったが、水道があり、ぼくのプラスチック製ヘルメットで水をためて浴びれば、体を洗うことができた。ところで、今回の旅でもぼくのこのシンシナティ・レッズの赤ヘルがいろいろと役に立った。水浴びのための桶、炭をおこすときのうちわ、まくら、腰掛け、そしてパンクしたときの穴さがしのための洗面器等。

さて、この公園には、橋を羊羹を切るようにして得た実物大で厚さ2メートル余りの三片のコンクリート大ブロックがモニュメントとして並べられており、これらは断面が逆台形で中は空洞であった。ぼくはこの中にテントを張った。川上博士と石塚助手はこのブロックのひさしの下に設営した。ブロック間にベンチとテーブルがあったが、料理は浜に下りて、炭をふんだんに使ってなされた。博士の指導で、暴れん坊の刺し身にした残りの部分を水で煮て醤油を加え、吸い物を作った。これは旨かったので、ぼくは断熱ポットに入れてあとでまたテントの中でゆっくり飲んだ。

毎夜のことであったが、まずオリオンビールで乾杯したあと泡盛をあおった。博士は、バーボン・ウィスキーを最も好むが、郷に入っては郷に従え、とどんな小さな店にも必ず置いてあった地

元の泡盛を買い続けた。これのお湯割りもなかなかよかった。ぼくらにとって一日は紅茶で始まり泡盛で完了するのだ。

その夜は特に星がよく見えた。ぼくらは公園から急な坂を降りたところにある浜で夕食と晩酌をした。ぼくは泡盛をいつもより多く飲んだせいか、いつのまにか水際近くの砂の上に横たわって星を眺めていた。波の押し寄せては引く絶え間ない音の繰り返しは足元で聞こえる。博士と助手が、頭の後ろのほうで何やら話している。ホタルがあそこにいるとか、星がみごとだとか、そういえばパソコン用の星座ソフトを買った、とか。ふと、先ほど公園で会ったある漁師の話を思い出した。「今夜あたり、ウミガメが卵を産みに浜に上がってくるかもしれんよ。」ぼくは、おもむろに立ち上がり水際をヘッドライトの明かりを照らしながら歩きはじめた。カニがあわてて逃げてゆく。波がサンダルを履いたぼくの足を気持ちよく洗ってくれる。夜の海に釣り舟が幾つか出ていて、明かりが波の上をチラチラとゆれている。ときたま大橋を猛スピードの車が走る。もうウミガメはこの浜には来ないだろうという気がした。ぼくらは食器や炭など貴重品でない物をすべて浜に残し、公園のテントに戻って寝た。

夜半、ぼくは目を覚まし、波の音が気になったので、浜に下りて行ってみた。ライトで照らすと波打ち際はぼくらが去った時より数メートルほど上の方にあった。しかし、食器類は無事だった。ぼくは安心したが、念のためにそれらをずっと上の方に移動した。テントに戻りポットからまだ熱い魚スープをコップに注いで飲んだ。そして、横になって昔のことなど思いめぐらしていたが、やがてそれも fade out して眠りが訪れた。

4月28日

未明より風を伴うかなりの雨が降った。外が明るくなってからも、やがて雨が止んでからも、ぼくは横になったまま浅い眠りと瞑想を繰り返していた。眠りから覚めると、あることを瞑想し、しばらくすると次第にその思いが fade out し、再び眠りが訪れ、そして目が覚めるとまた同じ瞑想が始まる。そのたびにぼくの体は、寄せては引く波に揺れる波打ち際の丸棒よろしく寝返りをうった。とりとめのない瞑想は次第に浅い眠りの中の夢と交錯し、さらに込み入った難解な迷路にぼくを導き入れた。

9時過ぎになってぼくはこのとめどもない繰り返しから身体をふり切ってテントから顔を出した。すると、博士と助手君のふたりは来訪者を接待していた。それは男性トライアスリートだった。彼は、レース中は必死で走ったので周りの景色がほとんど目に入らなかった、例えばここでは西平安名岬の発電用風車が回るのを見たが、その他の風景の記憶は全くないと言う。それで今こうしてゆっくりレースのあとをたどりながら、素晴らしい景色を堪能しているのだそうだ。この人の自信に満ちた他人に対する親しみの込め方から、過酷なレースを完走した者であることがう

かがえた。

やがてぼくらはいつもより遅い朝食を済ませると、島巡りをするために、テントは設営したままで貴重品だけを身につけて自転車で1時間余り走った。ブロックモニュメントの内壁に貼ってあったプラスチックの新しい絵入り地図によると池間島には大きな沼があり、木製の遊歩道も設備されており、白い野鳥もいる。そこでぼくらはまず沼を探した。しかし道はすべて微妙にカーブしており、しばらく走っていると同じ所に出てきたりしてぼくらの方向感覚もマヒしてきた。それに、この島は標識がなく地図も役に立ちそうでなかった。とうとうサトウキビ畑のお婆さんに沼の場所を聞いた。するとこのお婆さんの反応が興味深かった。彼女は我々が沼を探しているのは、喉が乾いて水が欲しいからだと思い込んだのだ。だから場所を教えてくれるのではなく、今はもう誰もあそこの水は飲みませんよ、どこそこに行く水道がありますよ、と言う。ぼくが、水が欲しいんじゃないのです、と話しても老婦人は「昔の人はあそこで水を飲んではいたけど・・・」といつまでも飲料水のことにとこだわった。今では宮古島からパイプラインが来ていて、島の人々は水道で水を得られるが、かつてはここの人々は沼から貴重な水を得、海水で用が足せるものはできるだけ海水を使っていたのだ。島の老婆にとって、人が沼へ行く目的は飲料水を得る事以外には考えられないことだったのだろう。

この地方の人魚伝説によると、美しい人魚が漁師に捕らえられ、まさに味見をされそうになったとき、彼女は海の神に呼びわり助けを求めた。すると津波が襲ってきて島は波で洗われ、人魚はその波に乗って海に逃げ帰った。そして、その津波によってできたのがこの沼であるという。

ぼくらは、道を聞いてからも迷い続け、ついに大橋からは島の反対側にあたる灯台に出た。ここから左折し、野生のアサガオが咲いている砂利道を下って島の北側の浜に出た。自転車を置いて、海辺に出てみた。浜で珍しい形をした貝殻を拾ったり写真を撮ったりしたのち、そこにあった小舟のふなべりに腰を下ろして海を眺めてのんびりしていた。すると、一目で島の漁師とわかる美しい顔だちの若者がやってきた。ぼくらは「こんにちは」と挨拶したが、彼は一瞬どぎまぎした様子でこちらを見たかと思うと何も言わずに波打ち際まで行き、それに沿って歩いて、海水に洗われている大きな岩の影に隠れ、しばらくするとその岩の上に立った。六七分沖のほうをじっと眺めていたが、結局何をするでもなく去って行った。

彼が何をしていたのか、その時はわからなかった。しかしあとでわかった。実は彼が見ていた方向こそ「幻の大陸、八重干瀬（やびし）」のある海域だったのだ。これは、地元でサニツと呼ばれる毎年旧暦の3月3日（4月中旬）に約2時間だけ海より姿を現す広大な珊瑚礁の群で、その広さは宮古島以上であるという。近辺の人々はこの日時にフェリーボートなどで大挙して押し寄せ、この束の間の珊瑚大陸に上陸し、逃げ遅れた魚、エビ、タコ、貝類、その他あらゆる海の幸を手掴みで収穫する。まさに海の中から現れる豊作の畑である。要所要所には百を超える数の地名が付されており、たとえばかつて汽船が座礁した所は蒸気が関と呼ばれ、鯨が淵や、大蛸の

江といった具合に名付けられている。しかし、国土地理院の地図にはこの幻の潜水島はしるされていない。さて、宮古島滞在最後の日に入った理髪店の理容師の話によると、サニツの日だけでなくほとんど毎月大潮の日には規模と時間は縮減されるが、このヤビシは姿を見せているということだった。してみれば、この池間島の若者はいつも干潮時が近づくとここに来て沖を見て、ヤビシの出現の兆候である白い波が立っているか否かを観察していたのであろう。その時もし少しでも白いものが見えたら、ぼくらの座っていた小舟をこいで沖に出て、ヤビシに一番乗りをしようという腹づもりであったのだろう。ヤビシは豊かとはいえない池間島の人々にとって神から贈られた宝島である。今までに海に生きるありとあらゆる種類のものが神からの賜物としてヤビシのまな板の上に載ったことであろう。ならば賢明なる読者諸氏よ、このうら若き南海の美青年が、幼き頃より、いつか伝説で聞いた美しい人魚がヤビシの岩の上にとり残されることを、そしてそれをわが妻にめとることを願い、海神に祈り続け、その純粋な思いを崇高な信仰心にまで高めた結果、その成就を信じてここに立つのだ、というぼくの推察はあまりにも突飛であろうか？

しかし、またこのヤビシは科学的ロマンをもかき立ててくれる。池間島から橋を架け、このヤビシの上に巨大な海上都市を構築することをぼくは想像してみた。海中でも腐食しない水中コンクリートが開発されているのでこれを使えば基礎部は心配ない。ベニスのように道はほとんどが水路であってもよいし、建物の高さを一律にして屋上を道路で連絡してもよい。広大な海中水族館も作れよう。うまくすれば、魚の牧場もできよう。海の釣り堀もあっていい。サイクリングロードをつくれば、トライアスリートたちは、ヤビシを一周することにより宮古島の同じコースを自転車で二度回らなくてもよくなる。また、制限時間を2時間とすればこれ以内にヤビシを回れなければロードが水没するとすればスリルも出てくる。発電は太陽光線、風力、波力、および潮の干満を利用する。やがて、ここに空港もでき、巨大な多目的タワーもできる。しかしこの壮大な科学的ロマンと美しき青年の密かな夢は互いに排他的である。

ぼくらは再び島の沼を目指した。さらに島の人に聞いてなんとか沼にたどり着くことができたが、遠くから湖面を眺めることができる状態で数羽の白い鳥も見られた。公園の地図に描かれたような木製の湖上遊歩道などはなかった。誇大広告ならぬ、誇大地図だ。おそらくあの地図はこの島のこれからあるべき姿を描いていたのであろう。しかし、遊歩道など作って沢山の人が来るようになると今度は白い鳥がいなくなることもある。

ぼくらはテントに戻り、ぼくはしばらく浜に出て遊泳した。やがて石塚君もやって来た。岩があればたいい熱帯魚がいた。しかし、ここは橋の工事の後遺症なのであろう、あまり多くは見つけられなかった。テントに戻ると川上博士が早くも数本オリオンビールを購入しており、それを冷たく保つためにシャーベット種のア이스キャンディーもたくさん袋に入れていた。ぼくはこのアイスのほうをたくさんいただいた。やがてぼくは水浴びして着替えると昼寝をすべくテントでアイマスクをして横になった。しかし朝と同じ瞑想を繰り返すばかりでほとんど眠ることができなかった。

外では、新たなアイアンマンが次々にやって来ていた。博士自身サッカーやラグビーを愛するスポーツマンだから、彼らを温かくもてなした。ついには女性の完走者も来た。この時ばかりはぼくもテントから出て挨拶をした。ある者は、浜に出て泳ぎ、もずくをたくさんかき集めてきた。これをお土産にするのだという。少し賞味させてもらったが確かにもずくの歯ざわりであった。ぼくは同じ所を最前泳いだのだったが、もずくなどは味付けされて器に盛られたものしか知らないで海中で見かけてもとんと気がつかない。トライアスリートたちは、池間島を巡ったのち飛行機の時間を気にしながら次にゆくところを決めると去って行った。「サイクリングがんばって下さい」「来年もトライアスロンがんばって下さい」ぼくは彼らが池間大橋を宮古島のほうに走り去ってゆくのを見ながら寂しい思いを禁じえなかった。もうぼくもこのへんで旅を切り上げて帰ってもいいような気さえしてきた。

昼過ぎにぼくらは荷造りして池間島を去った。ぼくの地図に「きれいなビーチ」と紹介されていた東シナ海側のビーチを次の目的地に定めていた。途中、福山というところで石塚助手のチューブラータイヤがパンクし、スプレー式パンク修理具でそれを直した。その後、遅れを取り戻そうとするかのように川上博士はどんどん南下してゆき、ぼくと石塚助手は次第に遅れ、ついに博士の姿を見失った。博士はどこかで左折してビーチに下りて行ったのだ。そして、そのビーチがゴミが多くてきれいでなく、ぼくらもなかなか来なかったのも、彼は坂道を登って引き返した。しかしその時にはぼくらはもうそこを通り過ぎてしまったあとだった。彼はまた石塚助手のタイヤがパンクしたのだらうと考え、そこから池間島の方に引き返し、ついに東シナ海と太平洋への別れ道である南静園の三叉路まで引き返したという。

この頃、ぼくはまるで夢遊病者のようにひたすら走り続けていた。あまりにも長く博士の姿が現れないので、ぼくは上述の状況を危惧し、引き返そうかと思い自転車を止めて後ろから石塚君の追いつくのを待った。すると、やはり夢遊病者のように疲れ切った様相で走って来た彼は、そのままぼくを置いて更に進んで行った。放っておくと彼は東平安名（あがりへんな）岬の突端まで行くかもしれない。彼は2年前の日南海岸で、彼が先をゆく我々を視野に入れているのを見届けて横道に逸れたぼくと川島君を気づかぬうちに真っ直ぐ進み、ぼくらが先にいるものと思い込み、とうとう鹿児島県志布志まで行ってしまった。そのことを覚えているぼくは、彼を追いかけることにした。しかし、こういう状態のときの、つまり見えないが先にリーダーが走っているものと信じ込んだときの彼の走りはしぶとい。簡単に追いつけるものではない。石塚君、しかし君は先にいない者を追いかけていたのだ。決して追いつくことのできない者を追いかけていたのだ。目覚めよ、石塚君。君の慕う博士は君のずっと後方にいたのだ。君のいつも何かを追いかける姿は尊い。導くものを追ひ、あわよくばそれを追い越すということは若者の正しい姿だ。しかし若い故に導くものを見失い、あるいは見誤り、危険な速度とコースをとることもある。君が君を導くものをいつも自分の外に見つけようとするならこの危険はつきまとう。君の中に君のリーダーを育てるのだ。幻のリーダーを追うのではなく、自分が今リードしていることを自覚するのだ。

神の国を指し示す羅針盤は君の中にもある。

ぼくはようやく、石塚君に追いつき、引き返そうと言うと首をひねり怪訝そうな表情で返事をした彼を連れて、来た道に戻った。目の覚めるような美しい海がこんどは右にきたので、ぼくは何度も首を右に振った。二十分くらいたった時、川上博士がぼくらの方にやって来るのが見えた。ホッとした。ここで互いの非を論じ合うのは無意味であるばかりか、有害である。地図で「きれいなビーチ」と書かれた目的地としていたビーチをはるかに通り越してしまったぼくも愚かであったが、後続の姿を確かめないで左折した博士にも非はあった。しかし再会したときにだれもこれらを口にしなかった。

ぼくらはヒガという村で食購し、きれいでなかった「きれいなビーチ」の隣の与那浜に下り、ここでテントを張った。水際から10メートルくらい上がったところだ。ぼくは夜半にまた目が覚め、波の音が近づいているので外に出てみると、2メートルくらいの所まで波打ち際が迫っていた。そこでぼくはテントを丸ごと抱えて防波堤の後ろに移動した。結局、波はそれから先には上がって来なかったので、真夜中の大テント移動は無駄であった。が、移動していなかったなら波の音が気になって、安眠はできなかったろう。このようにものごとをすべて都合よく考えてゆけるなら、残りの人生も愛すべきものとなろう。

つづく

<http://p.booklog.jp/book/75806/read>

写真(photos):

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://www.amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)